

『現代ブラジル論 —危機の実相と対応力』

堀坂浩太郎・子安昭子・竹下幸治郎 共著

国際領域 主任研究官 林 瑞穂

ブラジルでは、2018年10月に実施された大統領選挙で、極右とみなされている元軍人で既存エリート層と距離があるジャイル・ボルソナロ氏が、対立候補者であった左派政党である労働者党（PT）のフェルナンド・アダジ元サンパウロ市長を破り、2019年1月1日に大統領に就任しました。ブラジルは、2000年代に中国の経済成長に伴う好調な輸出や旺盛な国内需要を背景とした経済成長を遂げ、BRICSの一角を担う新興国として世界的に注目を浴びていたものの、2010年代に入り、景気低迷や汚職問題に起因する政治的混乱により非常に困難な状況に直面しました。この状況を打破すべく、ボルソナロ大統領の改革手腕に国民の期待が寄せられています。しかし、最近でこそ現実主義的な姿勢を示しているものの、かつて過激な発言が目立った同氏に対する懸念も同時に存在しています。

今回御紹介する著書は、このような変動期にあるブラジルが「どこに向かっているのか」という問いを念頭に置き、同国の現状を整理し、今後の動向を理解するための下地作りすることを目的として取り組まれました。3名の分担執筆で、4部構成となっております。第Ⅰ部は2010年代のブラジルについて、第Ⅱ部は2010年代のブラジルを理解するために重要と思われる1985年の民主化以降の制度作りについて、いずれも「政治」、「経済・ビジネス」、「国際関係」の三つの観点から言及されています。また、第Ⅲ部は多面性に富むブラジルの輪郭を描くべく、「歴史」、「地誌」、「人と社会」についてまとめられており、第Ⅳ部では、ブラジル独立200周年に当たる2022年を見据えて、改めて政治、経済・ビジネス、国際関係の3点からブラジルの進むべき方向性について示唆されています。

1964年から85年までの軍事政権下のブラジルは、当初こそ国家主導の開発が進められて経済的に好調な時期もありましたが、政治的な自由の制限、インフレや対外債務及び保護主義的な経済政策などに起因する諸問題により閉塞的な状況に陥ってしま

した。また、冷戦構造の下で、国際社会から距離を置きつつ特定のイデオロギーにくみしない現実主義的な外交を展開していました。著書では、軍政期の反省を踏まえて1985年の民

主化以降は、政治的には市民憲法と呼ばれる「1988年憲法」、経済的には輸入の自由化・外資導入・内外資差別の撤廃・民営化・通貨安定によるインフレ撲滅などの新自由主義に基づく制度設計に取り組んできたことを示しています。さらには、外交について、冷戦構造の終結とともに始まったグローバル経済に対応すべく、国際的な課題を共有する参加外交、そして南米地域のみならず中東やアフリカなどの途上国とも連携する多角化外交を行うようになった点も指摘しています。ボルソナロ政権のもとで、現在のブラジルは失われたガバナンスを回復すべく改革に着手していますが、銃所持の規制緩和措置の決定や駐イスラエル大使館の移設・パリ協定からの離脱を臭わす発言など急進的な側面も見せています。本書では、このような状況下でブラジルの将来を考える際、ブラジルが政治的には「1988年憲法」を遵守するスタンスであること、経済・ビジネス面ではグローバル経済との連結があること、国際関係においては現実主義的な中庸外交が維持されてきたことによる1985年の民主化以降に作られた諸制度を切り口に捉えることが重要であると論じられています。

ブラジルは、推定200万人とも言われる世界最大の日系人コミュニティを内包する親日的な民主主義国家であり、また世界有数の農業国、かつ2億人を越える巨大な国内市場を有する、日本にとって重要な国の一つです。本書は新書ではありますが、この1冊を読むことで、ブラジルの重層的な構造や多面性をよく理解することができると思います。



『現代ブラジル論
—危機の実相と対応力』

著者／堀坂浩太郎・子安昭子・
竹下幸治郎
出版年／2019年
発行所／SUP上智大学出版